

年間第二主日

ヨハネ 1・29-34

2020.1.19

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高

教会の典礼暦は、先週の日曜日の主の洗礼の祝日をもって降誕節の季節から年間の季節へと移りました。教会の典礼暦とともに歩むわたしたちの信仰生活は、降誕節を経て年間の季節を迎えることによって、クリスマスに祝った、インマヌエルとしてわたしたちの日々の営みの中に来てくださった主とともに、主に導かれて歩む日々となります。わたしたちのもとに来てくださり、わたしたちとともに歩んでくださるわたしたちの主は、福音書に語られている主イエス・キリストです。日曜日の度ごとに、ミサの中で朗読される福音に耳を傾けるのは、福音書に語られているわたしたちの主イエス・キリストを、わたしたちの日々の営みの中にお迎えするためです。日曜日のミサの度ごとに、わたしたちは福音書に語られているわたしたちの主イエス・キリストのもとに集い、主のみことばに照らされ、主の御体である聖体に養われて、カトリック信者として生きる新たないのちの力を回復するのです。

典礼暦の A 年に当たる今年の年間主日に朗読される来週からの福音は、マタイ福音書に記されている順を追って展開して行きますが、それに先立って年間第二主日の今日のミサにはヨハネ福音書に記されている、イエスの洗礼に立ち会った洗礼者ヨハネのことばが響いています。四つの福音書にはいずれも、イエスがその活動を開始されるにあたって、ヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことが語られていますが、今日の福音に響く洗礼者ヨハネの証のことばは、そのようにして開始される、福音書に記されているイエスのご生涯がどのようなことを目指すものであるかをわたしたちに示しています。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」。これが、今日の福音において洗礼者ヨハネがイエスを指し示しながらわたしたちに告げているイエスのお姿です。ヨハネ福音書の初めに響くこの洗礼者ヨハネの証のことばによって示されている神の小羊としてのイエスの神秘は、同じヨハネ福音書のイエスの十字架の死の場面で再び取り上げられ、明らかにされます。他の福音書とは違ってヨハネ福音書では、イエスが十字架に上げられたのは、ユダヤの過越しの祭りの中心をなす安息日の前日に当たる準備の日であったと語られます。イエスの十字架

の場面を語るヨハネ福音書の記述は次のとおりです。過越しの祭りの聖なる安息日が始まる前に十字架に架けられた罪人の遺体をそのままにしておかないようにとの申し出を受けて、兵士たちがイエスと同じ時に十字架に架けられている罪人たちの足の脛の骨を砕いて絶命させようとやって来ます。しかし、イエスのところに来て見るとすでに死んでおられたので、その骨を折ることはせず、一人の兵士が槍でイエスのわき腹を突き刺すと血と水が流れ出たと語られています。このようなイエスの死の有様を語った後に、それに続けて次のように語られています。「これらのことが起こったのは、『その骨は一つも砕かれることがない』という聖書のことばが実現するためであった」。このように述べることによって、ヨハネ福音書は、イエスの十字架の死を過越しの祭りために屠られる小羊として示しているのです。過越しの祭りは、旧約聖書の出エジプト記に語られている神の大いなる救いのみわざを記念する祭りです。ヨハネ福音書に語られているイエスの時代のユダヤにおいては、過越しの祭りの安息日の準備の日に、エルサレムの神殿で祭司たちによって過越しの小羊が屠られ、この祭りのためにエルサレムに集った人々は、屠られた小羊を買い求めて、家ごとに、出エジプトの出来事を記念して、出エジプト記に定められているとおりの儀式に則って過越しの食事をともにしたのです。その際に分かち合われる小羊の肉は、その骨が一本も切り分けられていない丸焼きされたものでなければなりません。これが、出エジプト記に遡る過越し祭の律法の掟でした。このように見てゆくと、ヨハネ福音書は、イエスの十字架の死の意味を過越しの祭りを背景にしてわたしたちに示そうとしていることがわかります。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」という今日の福音に響くことばは、肉となってこの世に来られた神の子イエスのうちに輝くいのちの光を指し示すために、イエスに先立って神から遣わされた洗礼者ヨハネの証のことばです。洗礼者ヨハネは、彼がイエスを知る前に神からの示しを受けて、「世の罪を取り除く神の小羊」という証のことばによって、イエスの神秘をわたしたちに示しているのです。ヨハネ福音書の終わりまで読み進めれば、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」という、今日わたしたちが聴いたヨハネ福音書の初めに響く謎めいた洗礼者ヨハネのことばは、イエスの十字架においてその意味が示されていることが分かります。ヨハネ福音書はその全体を通して、福音書に語られている十字架の死に終わるイエスのご生涯を、肉となって、すなわちわたしたちと同じ一人の人間となってこの世に来られた神の小羊の生涯として語っているのです。同時に、今日わたしたちが聴いた「神の小羊」というイエスを指し示す洗礼者ヨハネのことばは、旧約聖書のイザヤ預言者のことばを思い起こさせます。イザヤ預言者は、全ての人の罪を負って苦難の死を受け入れる神のしもべ

の姿を、いけにえの羊になぞらえて語っています。イザヤ書に語られている苦難のしもべは、その苦しみ死によって、この世の罪のもとに苦しむ全ての人の苦しみを背負うことによって神からの救いをもたらす救い主メシアの姿です。こうしてヨハネ福音書はその全体を通して、十字架の上に死なれたイエスを、旧約聖書の神の救いのみわざを決定的に更新する「新しい過越しの小羊」であり、旧約の預言者が告げていた「真の苦難のしもべとしてのメシア」であるとわたしたちに示しているのです。旧約聖書に語られているイスラエルの民の歴史の中で神がもたらされ、約束しておられた神の救いのみわざは、「世の罪を取り除く神の小羊」であるイエスの十字架において、旧約のイスラエルの民の枠を超えて、今や全ての人に向けてもたらされたのです。イエスは、神の決定的な救いのみわざを全ての人にもたらすために、世の罪を取り除くために、新しい過越しの小羊となって、十字の上でその血の最後の一滴までも流し尽くして、神の子としてのそのいのちをわたしたちに与えてくださったのです。イエスのわき腹からその血とともに流れ出た水はわたしたちが受けた洗礼の水がどこを源としているかを示しています。さらに、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」という今日の福音に響く洗礼者ヨハネのことばは、新約聖書の最後の書であるヨハネ黙示録の中に荘厳にこだましています。そこでは、全てのもののアルファでありオメガである神の栄光の玉座の前には小羊であるイエス・キリストがおられ、その小羊の血によって洗われた白い衣を身にまとった数知れない人々が、小羊の行かれるところに付き従って、神の救いを讃える新しい歌を永遠に響かせます。

今日のミサの聖体拝領において、わたしたちも「神の小羊、世の罪を除きたもう主よ、われらを憐れみたまえ」と新たな心で信仰を宣言し、わたしたちの主イエス・キリストの小羊の食卓に与らせていただきたいと思います。